

スランプ
その他

目次

- 一、 スランプ
- 二、 プラトニック・ラブ
- 三、 笑い
- 四、 健全な「笑い」
- 五、 友情
- 六、 自信
- 七、 漫画の魅力

*
*

スランプ

スランプについて

例えば、ソクラテスは、その『弁明』のなかで、すぐれた詩人たちは、一種の「神がかり的状态」になって、「作品」を書いているという箇所が出てくるが、そのような状態こそは、まさに超「自我」の状態なのである。

つまり、ふだんの様々な「欲望や感情」などに振りまわされている雑然とした「自我」の状態から離れて、より密度の高い、それだけ自分自身になりきっている「純粹自己」の状態になつていような時にこそ、それは、例えば、学者でも、芸術家でも、文筆家でも、その他、どのような分野の誰であつてもよいわけだが、何か本格的な「思考（思索）活動」や何らかの「創作活動」などに深く溶け入っているような時にこそ、まさに「より密度の高い」（それだけ自分自身になりきっている「純粹自己」）の状態になつているのであり、そのような時には、あまり疲れを感じない。それは、尋常ならぬエネルギーが全身に満ちて来るからであり、この時ほど自分自身になりきつて生きている時はなく、まったくの「自足状態」に近いものである。そして、そのような一種の「没我的状態」になつて、本格的な「思考（思索）活動」や「創作活動」などにどこまでも深く溶け入っているような時にこそ、いわゆる「精神の飛翔」といふようなものは、生じやすくなり、何か自分の「力（力量）」以上の真に優れた「芸術作品」などが生み出されたり、また、未だ人類によつて解明されていないような様々な物事の「真実、真理、その他」などが、その人の「思惟界」で観て取れることが、非常に多くなるといふことである。

例えば、晩年のゲーテも、「……偉大なものは、ひたむきで、純真で、夢遊病者のような創造力によつてのみ産み出されるものである。」（『ゲーテとの対話』下）という言葉を残しているが、この言葉なども、まさに超「自我」の状態からこそ、真にすぐれたものが生み出されるということを表現しているものである。

一方、われわれは、いわゆる「スランプ」といふ精神状態を、よく経験することになるが、それは、今までは比較的容易に超「自我」の状態になれたものが、なぜか最近は、なかなか想うように超「自我」の状態になれないがために生じるものである。——つまり、われわれ生身の人間というのは、どうしても「世俗的な世界」に身をおいて実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされているために、なかなかそのような雑然としたふだんの「自我」の状態から離れて、より密度の高いそれだけ自分自身になりきっている「純粹自己」の状態にすんなり想うように入つて行けないからである。それゆえ、いわゆる「精神の飛翔」といふようなものが生じにくくなり、好調の時のような優れた「考えや着想」などが、想うように生まれにくくなり、月並みの状態からなかなか抜け出せず、悶々とした状態である期間、ずっと過ごしてしまうのが、まさに「スランプ状態」である。

それでは、そのような「スランプ状態」から抜け出すには、いったいどうしたらよいのか？ それは、非常に難しい問題であり、これという「決め手」があるわけではなく、多くは「気分転換」をしたり、また、スポーツの場合であれば、例えば、基本的な「練習」などを何度もくり返しながら、いわゆる「好調の状態」にもどそうとするものである。しかし、どのくらいで「好調の状態」にもどれるかは、本人にもまったく分からない状態であり、それゆえ、できる限りのことは、すべてやり尽くして、あとは、ただ待つばかりという方法しかないところに、この「スランプ状態」といふものの最大特徴があるのだろう。

ところで、スポーツの場合、よく「無心」で試合に臨むということを言うが、その「無心」とは、いったいどういうことなのか？ それは、まさに「様々な雑念」をなくして、本来の「自分自身になりきってプレーをする」ということであり、それは、取りも直さず、雑然とした「自我」の状態から、より密度の高い「純粹自己」の状態になるということである。そして、その「純粹自己」の状態とは、すなわち、本来の「自分自身になりきって生きている状態」ということであり、そのような時にこそ、全身に尋常ならぬ巨大なエネルギーが満ちてきて、ふだんの「自我」を超えることができ得るわけである。なぜなら、本来の「自分自身になりきって生きている状態」においては、自分の持てる力のすべてを「一点に集中させること」ができ得るからであり、それに比べて、様々な「欲望や感情」などに振りまわされている雑然としたふだんの「自我」の状態の時には、自分の持ち合わせる力が、あちこちに分散してしまうからである。

例えば、「火事場のばか力」という「言葉」があるが、それは、ふだんの時には一人ではとても持ち出せないような重いものでも、火事という非常事態に臨んだ時には、なぜかたった一人でもそれを持ち出すことができるということである。それは、なぜかと言えば、それはもちろん、脳からの抑制命令が解除されて、自分の持てる力のすべてを出しきるからであるが、それに加えて、その人にとって極めて大事なものであるがために、その人の気持ちは、ひたすらその大事なものを持ち出すことだけに集中しているために、その人の持てる力のすべてがまさに「一点に集中して持ち上げている」からである。そして、その時のその人の「心的状態」は、むしろ「無心の状態」に近く、まさに「その人自身になりきって生きている状態」である。というのも、あとになって、なぜあんな重いものを持ち出すことができたのか？ 本人さえよく覚えていないことが非常に多いからである。

むろん、そのような場合の超「自我」は、本来の超「自我」とは少し違うのかも知れない。ということとは、——例えば、スポーツの場合のように、いわゆる「身体(肉体)的部分」が「ふだんの状態」を越える場合と、もう一つは、——例えば、「思考(思索)活動」などのように、いわゆる「精神(思考)的部分」が「ふだんの状態」を越える場合と、まさに、この「二つの場合」があるということである。

さて、本来の超「自我」とは、様々な「欲望や感情」などに振りまわされている雑然としたふだんの「自我」の状態から離れて、より密度の高い、それだけ自分自身になりきれている本来の「自分自身」(つまり「純粹自己」)になることではあるが、そのような本来の「自分自身」になるといえるのは、プラトン風に言えば、まさに「欲望的部分」や「気概(激情)的部分」などの支配から離れて、いわゆる「理知的部分」に全面的に支配されるということである。——例えば、本格的な「思考(思索)活動」や何らかの「創作活動」などにどこまでも深く溶け入っているような時には、いわば一種の「没我的状態」になりやすいものであるが、それこそは、まさに超「自我」(つまり「純粹自己」)の状態であり、そのような時にこそ、いわゆる「精神の飛翔」というようなものは、生じやすくなり、例えば、未だ人類によって解明されていない様々な物事の「真実、真理、その他」などが、その「思惟界」で観て取れることが、非常に多くなるということである。

一方、スポーツの場合において、いわゆる「身体(肉体)的部分」が「ふだんの状態」を越える場合であるが、その場合にも、一種の超「自我」状態になっていることに間違いはないだろう。というのも、上述のように「無心の状態」を創り出すためには、どうして

も様々な「雑念（例えば不安や迷いその他等）」をなくして、本来の「自分自身」（つまり「純粹自己」）になることによつてこそ、その人の持てる力のすべてを「一点に集中させることができ得る」からである。逆に言えば、自分の「頭の中」（或いは「心の中」）で、「ああでもないこうでもない」とあれこれ考えたり迷ったりしている「ような時には、自分が分散している、自分がブレているような状態であり、そのような時には、自分の持てる力のすべてを「一点に集中させることができにくい」ということである。それゆえ、例えば、すぐれたプレーができていた時には、その人自身の「心の中」では、様々な「雑念（例えば不安や迷いその他等）」が消えて、本人も驚くほど全体の動きやその場の状況が極めて冷静に観て取れている状態であるとともに、その人の「身体」（肉体）の中には尋常ならぬ「巨大なエネルギー」が全身に満ちてきて、それを「一点に集中させて爆發させる」ことによつて、その人の「身体（肉体）的部分」は、ふだんの「状態」を遙かに越えることができ得るということである。

ただ、ここではつきりと区別しておかなければならないことは、次のようなことである。つまり、ここで言う超「自我」というのは、いわゆるフロイトの「超自我」とは、はつきりと違うということである。そして、ここで言う超「自我」というのは、ふだんの様々な「欲望や感情」などに振りまわされている雑然とした「自我」の状態を超えて、より密度の高いそれだけ自分自身になりきっている「純粹自己」の状態になるということである。（つまり、ここで言う超「自我」とは、すなわち、「純粹自己」のことであり、そこからこそ、真に優れたものが生まれて来るということである。）

それをプラトン風に言えば、いわゆる「欲望的部分」や「気概（激情）的部分」などの支配から離れて、いわゆる「理知的部分」に全面的に支配されることによつて、今までの雑念とした自我から、より自分自身になりきっている「純粹自己」の状態になるということであり、この時ほど様々な「欲望や感情」などから開放されて、自分本来の「魂」そのもの（つまり「純粹自己」）になりきって生きている時はない。そして、そのような「純粹自己」の状態となつて本格的な「思考（思索）活動」などに深く溶け入っているような時にこそ、いわゆる「精神の飛翔」というようなものは、生じやすくなり、何か真に優れた人類的な「発明、発見、創造、行動、その他」などが生み出されることにもなるということである。

*

*

プラトニック・ラブ

プラトニック・ラブ

昔は、よく『プラトニック・ラブ』という言葉が、若い人たちの間では好んで使われたりしたのだが、今日ではほとんど「死語」と化しているのではないかと思う。それというのも、今日の「考え方」では、男女間の「恋愛」を根底から成り立たせているものが、そもそも「リビドー」（性欲）であり、その「リビドー」（性的欲求）を完全に排除してしまった精神的な「結びつき」だけの「恋愛」というものは、全く意味をなさないことになっていくからである。——つまり、「性的な関係」を前提として行なわれるものが、まさに男女間の「恋愛」であり、それゆえ、精神的な結びつきだけで「性的交渉」をまったく望まない「恋愛」というものは、まれにはあるとしても、今日ではほとんど一笑に付せられてしまうものである。……

また、男女の間で「友情」は、果たして可能だろうかということが、よく言われたりするものである。この問題も、男女の間で「肉体的な結びつき」を望まず、ただ精神的な「結びつき」だけで満足でき得るだろうかという意味合いを含む。つまり、男と女が親しく心や情を通わせるようになれば、自ずと「肉体的な結びつき」も望むようになるだろうという考え方に立つわけである。むしろ、本来「友情」とは、お互い相手の人間性を信頼し合っているところに成り立つものであり、それゆえ、いわゆる「利害や損得あるいは性的関係」などで結びついている関係ではなく、それは、むしろ「精神的な結びつき」である。それゆえ、お互い相手の人間性が信じられなくなれば、自然とお互いの「友情」も崩れていくしかないだろう。また、親友が困っている時には利害や損得などから離れて、親友のために自分にできること（例えば、精神的バックアップなど）をすることになるかと思う。そのようなことが「男女の間」で可能だろうか？　つまり、そのようなことをするのは、心のどこかで「何らかの下心」（例えば「肉体的な交渉」など）を望んでいるからではないかという問題である。——そのように「男女の間」では、どうしても「性的な感情」を完全に排除することが極めて難しい。しかし、同性の場合であれば、ふつう「性的な感情」にそれほど惑わされずに精神的な結びつきだけで十分成り立つものではないかと思う。

例えば、若いプラトンは、晩年のソクラテスとめぐり逢い、そのソクラテスと親しく言葉を交わしていくうちに、若いプラトンは、ソクラテスという人物に強く心惹かれ、惚れてしまうわけである。むしろ、それは、ソクラテスの「肉体」（容姿・容貌）に惚れたわけではなく、ソクラテスの「精神（魂）」に強く心惹かれ、惚れたということである。それが、まさに「プラトニック・ラブ」なのである。——つまり、「プラトニック・ラブ」というのは、確かに、最初の段階では、相手の「肉体」に惚れることから入るが、しかし、それは、あくまでも「入り口」に過ぎず、何よりも大事なことは、相手の「精神」に惚れるということであり、しかも、それは、真に優れた「精神（魂）」に強く心惹かれ、惚れるということである。

それでは、なぜ、若いプラトンは、真に優れた「精神（魂）」に強く心惹かれ、夢中になったのだろうか？　ここが最も大事なところであり、それは、第二次性徴とともに、目覚めたプラトン自身の「自我（自己）」が、何よりも「成長・成熟」することを望んでいたからである。つまり、若い時とは、肉体的にも精神的にもまさに「成長期」にあたっているわけである。そして、肉体がどんどん成長するためには、様々な栄養価の高い「食料」

などを撰取することがどうしても必要不可欠であるのと全く同じように、その人の「精神（自己）」を真に育て上げるためには、様々な栄養価の高い「高質の知的食料」などを撰取することが、どうしても必要不可欠になって来るからである。

そして、その様々な「高質の知的食料」としては、例えば、優れた「書物」などを数多く読んだり、また、様々な「専門的（学問的）知識」などを学んだり、あるいはソクラテスのような真に優れた「精神（魂）」などと深く交わることなどの積み重ねによってこそ、その人自身の「精神（魂）」を真に「成長・成熟」させることができ得るわけである。そして、この時期のもの凄い「知識欲」（或いは「真善美欲」）こそは、まさに「神的な恋（エロス）」であり、その「神的な恋（エロス）」というのは、プラトン風に言えば、遙か彼方にある「叡知界」（つまり「イデア界」）の方へと想いを寄せて、最究極的には「美のイデア」や「善のイデア」などを観て取る地点にまで到達しようとするものであり、そのようなもの凄い「知識欲」（或いは「真善美欲」）こそは、まさに「プラトニック・ラブ」という言葉の本来の「意味合い」になるものである。

ところが、それはいつ頃からか、男女間の「恋愛」において、精神的な結びつきだけでなく、肉体的な関係を持たない「清純な恋愛」といった曖昧な「意味合い」で使われるようになってしまった。——しかし、本来は、若いプラトンが晩年のソクラテスという真に優れた「精神（魂）」に強く心惹かれ、惚れることによって、その人自身も同じように真に優れた「精神（魂）」になろうとするためのものであり、そのためにも、いわゆる「美のイデア」や「善のイデア」などを最究極的に観て取るうとする一連の「恋愛」こそは、まさに「プラトニック・ラブ」という言葉の本来の「真意」になるかと思う。

ただ、ここで問題になるのは、同性との間の「プラトニック・ラブ」であれば、それほど問題はないだろうが、異性との間の「プラトニック・ラブ」の場合には、どうしても「性的な感情」が複雑にからみ合ってくる。——例えば、先生と弟子（生徒）との間では、とかく「男と女の関係」になりやすい傾向が非常に多いということである。もちろん、そういう関係になるならないは、当人同士の問題ではあるが、そういう関係になれば、どうしても「男と女の関係」への思いの方がより強くなり、それに伴い、いわゆる「プラトニック・ラブ」の方は、より後退してしまうことが多いかと思う。

ただ、ここで最も大事なことは、本来、「プラトニック・ラブ」とは、真に優れた「精神（魂）」に強く心惹かれ、その人と親しく心を通わすことによって、やがては「美のイデア」や「善のイデア」などを観て取る地点にまで到達しようとするための「恋愛」であり、それゆえ、いわゆる「性的関係」を持つか持たないかは、それほど大きな問題ではないのである。（ただ、お互いが「愛欲の対象」だけになってしまうのでは、最究極的な目的でもある、いわゆる「美のイデア」や「善のイデア」などを観て取るうとする、まさに狭義の「プラトニック・ラブ」とは、かなり違ったものにはなるだろうが……）

それに加えて、古今東西を問わず、真に優れた「文学や芸術あるいは書物」などを通じて、古今東西の真に優れた「精神（魂）」と深く交わることによって、自分自身も真に優れた「精神（魂）」になろうとする「恋愛」をも含めたものが、まさに「プラトニック・ラブ」ということになるかと思う。それは、古今東西を問わず、真に優れた「精神（魂）」に強く心惹かれ、深く交わることによって、最究極的には「美のイデア」や「善のイデア」

などを観て取る地点にまで到達しようとするものであるとともに、それは、何よりも「真善美」(つまり物事の「真実、真理、その他」など)をどこまでも愛し求めてやまないような「精神(魂)」になるような「恋愛」こそは、まさに「プラトニック・ラブ」(つまり「プラトニックな愛」という言葉の「真意」になるかと思う。

*

*

笑い

笑いについて

例えば、「物まね」というのは、なぜ、われわれ人間にとって面白い対象となり得るのだろうか？ この問題についても、少し考えてみたいと思う。例えば、ある歌手の歌を巧みに真似ている人を見ている人たちは、「あつ、似ている、似ているよ。特にここんところが非常によく似ているなあとか、あるいは、逆に、あまり似ていないなあ、どうも感じが違うな。そういう感じではなく、もっとこういう感じなんだけれどもなあ」とか、その他、そういう思いや感じで見聞きしているのが、ふつう一般的ではないかと思う。

それでは、それらは、いったい何を意味しているのだろうか？ それは、言うまでもなく、「二つのもの」（それは「歌手の歌い方と真似する人の歌い方」とを、あれこれ比較対照しながら、見聞きしているということである。つまり、ある歌手の歌をただ単に見聞きしている時には、その歌手の「歌い方」などをいちいち分析せずに、そのまま素直に見聞きしているものだが、ある歌手の歌を巧みに真似ている人を見ている時には、逆に、「歌手の歌い方と真似する人の歌い方」とをつねに比較対照しながら、その一つ一つをあれこれ「分析的に見聞き」していることになるかと思う。そのように、つねに「比較対照しながら、その一つ一つを分析的に見聞きすること」によってこそ、今までただ単にある歌手の「歌い方」をあまり分析せずに、そのまま素直に見聞きしていた時には気づかなかった、その歌手の「歌い方」の実に様々な特徴がはつきりと見えてきて、それゆえ、あらためてその歌手の「歌や歌い方」などを、はつきりと再認識することになるということである。

もちろん、真似する人は、ある歌手の「歌い方」の特徴を巧みにとらえて、それをかなり大げさに真似をしているわけだから、真似する人は、すでに真似る歌手の「歌い方」などの特徴をよく知っていることになるわけだ。しかし、それを見ている人たちは、その「物まね」を見聞きすることによって、「ああ、そうそう、あの歌手には確かにそういう歌い方や顔の表情の仕方が間違いないあるわ」という感じで、あらためて「再認識」（つまりはつきりと知る）ことになるわけである。そして、あらためて「再認識」すること、いや楽しいこと」になっていくということである。つまり、「物まね」というのは、その真似する「対象」の「特徴や本質的なもの」を巧みにとらえて、それをわれわれの目の前にはつきりと浮かび上がらせて見せてくれるために、それを見ている人たちも、「ああ、そうそう、そういうところが確かにあるわ」という感じで、その対象の「特徴や本質的なもの」を、あらためてはつきりと「再認識」することになるわけである。

そして、そのあらためて「再認識」することによって、その「歌手」そのものへの「興味や関心」などを呼び起こし、それゆえ、時には、その「歌手」の方が、再び、人気を得て、浮かび上がって来る（或いは脚光を浴びる）ことにもなるわけである。一方、物まねの最大の「弱点」は、ある「真似る対象」（つまり「モデル」）があつて、初めて可能になるものであり、それゆえ、どうしても「真似る対象」（つまり「モデル」）に依存する傾向があるということである。もつと極言すれば、真似される人たちが、「自分の真似をすることを断じて許さない」ということになれば、真似する人たちは、公に「物まね」をすることができないことになってしまう。つまり、「真似する対象」（つまり「モデル」）があつて、初めて可能となるものであり、それゆえ、どうしてもモデルに依存する傾向が

強く、いかなるものにも依存しない独立したものは、なりにくいということである。

ただ、ここではつきりと留意しておかなければならないことは、その物まねがまさに「本物そっくり」であるような場合のことであるが、それは、次のようになるかと思う。つまり、最初は、「ああ、よく似ているなあとか、本物そっくりだなあ」というような感じで見聞きしているわけだが、やがて、それが「あまりにも似ているような時」には、いわゆる「笑い」というものは、起りにくくなり、むしろ黙って見入ったり聴き入るような状態になってしまうのである。それは、なぜかと言えば、いわゆる「笑い」というものは、本来、「ズレ」ところから生じる面白さであり、それゆえ、まったく「ズレ」というものが感じられないものには、「笑い」というものは、生じにくいものだからである。一方、見ている人たちは、どこまで本物そっくりに似ているのだろうかと思っ、どうしても黙って見入ったり聴き入るような「心的状態」になりやすいものである。そして、その途中で、どこか本物と違うところ（つまりズレる）ところがあれば、そこで、「あっ、ここんところは、ちよつと違うなあ」という感じで最後まで見聞きしたあとで、「それにしても、よく似ていたなあ」といった感じになるかと思う。一方、最後の最後まで本物そっくりであれば、それは、「もうすごいなあ」という感じとともに、本物の歌手がまさにそこで歌っているというような「感じ」（錯覚）にも襲われるものである。

そして、今度は、自分自身が、カラオケなどで、ある歌手の歌を身ぶりも歌い方も、それこそ、できるだけ本物そっくりに真似て（つまり、その人になりきって）、実際に歌を歌ってみるのも、楽しいことである。それは、どうしてかと言えば、それは、歌を歌うことと自体が、楽しいことであるとともに、その人になりきって実際に歌ってみることによってこそ、その歌手が、歌を歌っている時のまさに「心の動き」や「呼吸の仕方」（息づかい）、或いは「なぜ、ここはこういう顔の表情や声の出し方、或いは身振りになるのか」などを、あらためて微妙なところまで、わが身にかけて、実感としてはつきりと理解することができ得るようになるからである。というのも、その人を「外から見ていた」時には、決して分からなかったことが、その人になりきって生きてみることによってこそ、その人を「内から観ている」状態となり、その人の「心の動き」やその他などを、まさに「わが身にかけて、実感として感じることができ得るようになる」ということである。

それゆえ、どこまでも厳密かつ徹底した「物まね」（つまり、その人自身になりきって、その人の「内的世界」を徹底的に生きてみるという方法）こそは、まさに「人間理解の最良の方法」の一つともなり得ているのである。

*

*

健全な「笑い」

健全な「笑い」について

健全な「笑い」というのは、本来、「生の充実感」から生じてくるものである。例えば、赤ちゃんやニコニコ笑っているのは、何も他人の欠点や失敗などを見聞きして、それを笑っているというよりは、（むしろ、そういう場合もあるだろうが）、むしろ安心感や心地よさあるいは生きていくこと自体が楽しいというような、そういう「生の充実感」から生じて来る場合が多いのだろう。また、夏の海に海水浴などに遊びに行った時に、その波打ち際でキヤーキヤーと言いながら、友だちや波などと戯れながら楽しく笑っているのは、何も他人の失敗や欠点などを見聞きして、それを笑っているというよりは、むしろ自分の体や心を生きていくと躍動させて遊んでいる、その「生の充実感から生じて来る笑い」であり、そのような「笑い」こそ、本来、「健全な笑い」である、ということである。

例えば、子供たちが、かくれんぼや鬼ごっこ、その他の遊びなどで楽しく笑っているのも、何か誰かの欠点や失敗などを見聞きして、それを笑っているというよりも、もちろん、そういう場合もあるだろうが、しかし、本来的には、自分の体や心を生きていくと躍動させて遊んでいる、その「生の充実感」から生じて来るものである。つまり、われわれ人間にとつて、自分の体や心を生きていくと躍動させて生きている、その「生の充実感」から自然と生じて来る「笑い」こそは、本来、「健全な笑い」と呼べるものである。

ところが、今日のわれわれの「笑い」というのは、その多くが「他人の欠点や失敗或いは幼稚さや愚かさ」などを笑うような優越感的な「笑い」になりやすい傾向が強いかと思う。——例えば、おかしくしておかしくて、もう腹を抱えて笑い転げるような笑いがあるとすれば、それは、必ず、何かを犠牲にした上に成り立っている笑いであることが多いのだろう。もちろん、笑いというものが、どうしてもそういう傾向になりやすいのは、ある程度は、仕方がないとしても、そういう傾向が、あまりに強くなり過ぎてしまうと、その笑いを見ている人たちの「心の中」でも、例えば、なにもそこまで言ったり、やったりしなくてもとか、また、何かつまらないことを言ったり、やったりしているなとか、あるいは、ニヤニヤと相手を軽蔑するような笑い、その他、そういう「空虚な笑い」（つまり充実感が伴わない笑い）になりやすい傾向があるかと思う。しかも、そういう「空虚な笑い」（充実感が伴わない笑い）というのは、その時々、楽しい（あるいは気晴らしになる）としても、その人の「心」をほんとうに永続して満たしてくるものではないので、そういうものばかりだと、どうしても「空虚な思い」（満たされない思い）に襲われるとともに、そのような「内容のないもの」ばかりを見聞きしていると、内容がないために「頭の中」にはこれという「確かなもの」が残らず、次第にその人の「頭の中」も「空虚」になってしまい、やがては精神の「白痴化」（或いは「砂漠化」）が進むことにもなりかねないものである。それでは、その「空虚の思い」（つまり「満たされない思い」）を満たすものは、一体、何かと問えば、それこそ、まさに「内容のあるもの」によってこそ、われわれ人間の「心の中」は、真に満たされることになるということである。

それでは、「内容のあるもの」（ここでは内容のある笑い）とは、いったいどういうものかと問えば、それは、人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを巧みにとらえているとともに、一面では「カタルシス」（心の浄化）をも呼び起こすようなものであり、笑わせるばかりではなく、泣かせたり、考えさせるようなところもあると

いうことである。その例としては、例えば、チャップリンの『ムーンライト』や『モダンタイムズ』のようなものは、そういうものになるのだろうし、また、日本では『藤山寛美の新喜劇』や『寅さんシリーズ』などが、あるいはそういう範疇に入るのかも知れない。つまり、演技や内容の面白さとともに、人情の機微などで見ている人たちを泣かせたり、また、ものを考えさせたりするところがあるということである。

*

*

笑わせて

しかも泣かせる

喜劇かな

友情

友情について

例えば、「友情」とは、何かと問えば、それは、お互いの「信頼関係」からなり立っているものである。それゆえ、「友情」というのは本来、「精神的な結びつき」であり、いわゆる「利害や損得あるいは性的関係」などで結びついているものではないということである。そして、そのお互いの「信頼関係」が崩れてしまえば、当然のことながら、お互いの「友情関係」も崩れていくしかないということである。

*

*

まず最初は、すべて「出逢い」から始まり、そして、お互い何度か関わっていくなかで、お互いの「人間性」その他なども少しずつわかり始め、うまくやっていけそうな感じやいやだなあと思うような感じ、また、親しくなれそう感じやそうではない感じ、また、話が合いそうな感じやそうではない感じ、あるいは、人間として信じられそうな感じやそうではない感じ、その他、そのような実に様々な「思いや考え」などが錯綜することになるかと思う。そして、そのような感じから、やがて、親しくなれそうな「友だち」なのか、それともそうではない「友だち」なのかに自然と分かれていくことになり、結果として、親しくなれた「友だち」のなかでも、お互い「信頼関係」がそれなりになり立っている友だちとの間にこそ、いわゆる「友情」というものは、自然と生じて来るといえることである。そして、実際に何度も何年も親しく関わっていくなかで、その「信頼関係」がより強まれば強まるほど、それだけお互いの「友情関係」も深まり、最終的には、まさに無二の「親友」関係にまで深まっていくということである。

例えば、太宰治の『走れメロス』という作品は、非常に有名であり、それゆえ、細かな説明は、省略しますが、主人公のメロスと身代わりの親友との関係は、まさに無二の「親友」関係であり、それゆえ、お互い相手を信頼しきっている関係であったわけである。そこで、メロスは、三日目の日没までには必ず戻るといふ約束で、妹の結婚式に参列をし、それも無事に終えて、再び、町へと戻るその途中で、前日から降った雨で、増水した川を必死で泳ぎ切ったり、また、山賊に襲われたりと、いろいろな障害に遭いながらも、やつとの思いで町へと戻って来るわけである。——そこで、メロスは、親友に、一度だけ「親友を裏切るような気持ちに襲われた」ことを告白し、相手の親友も、一度だけ「疑ったことがあった」と告白するわけだが、ここで最も大事なことは、メロスは、「自分を信頼している親友を裏切ろうとしたこと」を恥じ、また、相手の友だちも、「親友を一度でも疑ったこと」を恥じたということである。しかも、暴君も、「人間が信じられないということ」を恥じたということである。これは、一体、どういうことなるのか？ それは、次のようなことである。——つまり、「人間関係」というのは、すべて「信頼関係」から成り立っているものであり、それゆえ、「信頼関係」が崩れてしまえば、すべての「人間関係」も崩れていくしかなく、それは、「友人関係」、「親子関係」、「夫婦関係」、「恋人関係」、「愛人関係」、その他、どのような「人間関係」であっても、すべて同じことである。

*

*

例えば、信じていた人間から裏切られたりした時には、誰でもショックを受けるとともに、そのようなことを何度も繰り返せば、もう人間そのものが信じられなくなると、最終的には「人間不信」や「人間嫌い」になってしまう可能性が高いということである。つまり、

「人間関係」の結びつきとは、結局は、相手が信じられるか、信じられないかの問題であり、相手がまったく信じられなければ、お互いの「関係」も成り立たないものであり、相手がある程度信じられると思えるからこそ、相手との「関係」も生じて来るということであり、それゆえ、相手の人間がどこまで信じられるかにほぼ正比例して、相手との「人間関係」もそれに見合った関係になっていくものである。——もちろん、人間を盲目的に信じることは、危険なことであるし、逆に、人間がまったく信じられなければ、そもそも「人間関係」そのものが成り立たないということである。それゆえ、われわれ人間というのは、実に様々な人間との「実際の関わり」のなかで、ああでもないこうでもないという前述のような実に様々な「思いや考え」などが錯綜するなかで、やがて、相手の人間との関係も、それに見合ったような関係になっていくということである。

最後に、「友情」とは、いったいどういうものかと問えば、それは、まさに「友との情」であり、その「友との情」というのは、例えば、一緒にいて楽しいという「情」であり、また、お互い気が合うという「情」であり、また、相手がそれなりに信じられるという「情」であり、また、何かの時には、助けたり助けられたりするという「情」であり、また、親しく心を通わすことができるという「情」であり、また、何かがあれば、気軽に相談し合えるという「情」であり、また、一緒に旅行に行ったり、一緒に寝泊まりすることもできるといふ「情」であり、また、お互い相手をそれなりに理解し合えているという「情」であり、また、何かがあれば、真つ先に駆けつけるといふ「情」でもあるということである。もちろん、その他、いろいろあるかと思うが、大事なことは、お互いの「信頼関係」がしっかりとできていくからこそ、お互い気兼ねなく気楽に付き合うこともできるし、また、心を割っていろいろと話をすることもできるといふことである。

*

*

信頼こそ、

仲を保つ

秘訣かな

自信

自信について

例えば、「自信」というのは、その人の「心の中」に、その人にとって「自信」となり得るに必要な量の「確かな手応えと実績」とが降り積もることによってこそ、初めて、いわゆる「自信」というものを持つことができ得るようになることである。これが、最も「根底的な自信」になることである。もちろん、それに加えて、他人からの高い評価や賞賛、また、声援、応援、励まし、激励、あるいは支援（支持）者や理解者、その他などに恵まれることによって、さらなる「自信」につながるということである。逆に、他人からの低い評価や酷評、また、無視、非難、嘲笑（あざけり）、あるいは支援（支持）者や理解者、その他などにあまり恵まれない、孤立無援、その他である場合には、どうしてもその人の「根底的な自信」というものも揺らぎやすく、また、「自信」というものは、なかなか持てないということにもなりやすいということである。

もちろん、自分に絶対的な「自信」が持てているような場合には、他人からどのような評価を受けようが、そのようなことによって、自分の絶対的な「自信」というものが、揺らぐということはないのかも知れないが、それこそは、まさに絶対的な「確信」であり、その絶対的な「確信」というのは、いわゆる絶対的な「自信」よりも、さらに深いものであり、それゆえ、何を以ってしても、絶対に「揺らぐことがない」というものである。――例えば、ガリレオは、自分で製作した「望遠鏡」を使つて、様々な「天体」を可能な限り厳密かつ徹底的に「観測」していくうちに、いわゆる「天動説」よりも、むしろ「地動説」の考え方のほうが、遙かに正しいという「確信」を得るわけである。そこで、そのことを記した『天体対話』という書物を公刊すると、翌年、異端審問所で「裁判」にかかれ、その内容が「聖書に反する」という判決を受けて、七〇歳のガリレオは、結果として、「終身禁固刑」に服することになるが、その異端審問所を出る時に、ガリレオは、いわゆる「……それでもそれ（地球）は動く」という非常に有名な言葉をつぶやくことになるわけである、それこそは、まさに絶対的な「確信」であり、まさに何を以ってしても、絶対に「揺らぐことがない」ものになるのである。

*

*

それゆえ、「自信」にも、それぞれの「段階」があり、一つは、「自信」が持てない（〇～二〇％）があり、一つは、あまり「自信」がない（二〇～四〇％）があり、一つは、それなりの「自信」（四〇～六〇％）があり、一つは、かなりの「自信」（六〇～八〇％）があり、一つは、非常に強い「自信」（八〇～九〇％）があり、そして、最後に、いわゆる絶対的な「自信」（九〇～九九％）があり、その極みに、絶対的な「確信」（一〇〇％）があるということである。例えば、自分の「容姿・容貌」には、あまり「自信」がないとか、また、「運動能力」には、それなりの「自信」があるとか、また、自分の「料理の腕」には、かなりの「自信」があるとか、或いはまた、「クルマの運転」には、絶対的な「自信」があるとか、その他、そのようなことになるということである。

そして、「自信」というのは、その人を支えている、いわば一つの「心の主軸」であり、その「心の主軸」というものを失うことは、どうしても「精神的な安定が揺らぎ、様々な不安や悩みなどに襲われる」ことも多くなるかと思うが、それでは、そのような時には、いったいどうしたらよいのかと問えば、それは、結局、最初からやり直すしかなく、最初か

らやり直してみて、その人の「心の中」に、再び、その人にとって「自信」となり得るに必要な量の「確かな手応えと実績」とを降り積もらせることによって、再度、「自信」を取り戻すという「方法」を採るしかないのである。そして、そのようなことを何度も繰り返しながら、最究極的には、いわゆる絶対的な「自信」（九〇〜九九％）の持てるようなところまで、さらには、その極みの絶対的な「確信」（百％）にまで、自分自身をどこまでも「高めていく」ということである。

そして、その「最究極地点」こそは、まさに「自己完成」という地点にほかならないというのである。

*

*

手応へと

実績重ねて

自信かな

漫画の魅力

漫画の魅力

例えば、漫画というのは、まさにワンカット、ワンカットの、いわば「静止画」からできていて、それを読む読者が、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）で、そのワンカット、ワンカットの、いわば「静止画」を自然とつなぎ合わせて、いわば「映像の流れ」のようにして内容を理解して行くというものである。そして、漫画の最大の特徴というのは、特に「強調したい場面」、あるいは「決定的瞬間」などを、まさに極めて大きな「アップ画面」で、いわば大迫力の「激写」風に表現することによって、読む人に極めて鮮明な「衝撃」を与えることができ得るということである。それに加えて、様々なキャラクターの魅力や面白さ或いは色彩の鮮やかさや美しさ、その他、それらが漫画の最大の特徴であるとともに、漫画の最大の「武器」でもあるということである。なぜなら、読む人が受けるその極めて鮮明な「衝撃」こそは、まさに極めて「強力な印象」になるとともに、まさに「たまらない魅力」にもなっていくからである。

つまり、漫画というのは、一般的に、どこか大きなところがあり、また、現実にはふつうあり得ないようなこと、例えば、イヌやネコ或いは他の動物や植物、時には、人工物までが、まるで人間のように平気で言葉をしゃべったり、また、われわれ人間と対等に会話をしたりしているとともに、凄まじいまでの決闘シーンや超人的な諸能力、その他、もちろん、そのようなことは、現実には絶対にあり得ないようなことでありながら、漫画のなかでは、それらに何の違和感も感ぜず、また、何の矛盾も感ぜずに平気で読んでいられるのは、一体、なぜなのかと問えば、それは、われわれ「人間の脳」が持ち合わせている「空想（想像）能力」の素晴らしさであり、われわれ「人間の脳」というのは、現実を遙かに超越した「超次元的思考」が平気ででき得るということである。——例えば、過去、現在、未来というまさに「時空」を、あつという間に自由自在に「行き来」でき得る「タイムマシン」を持ち合わせていて、どのような時代、どのような場所、あるいは、どのような人間、動植物、恐竜、自然、宇宙、その他、何にでも、あつという間に会ったりでき得るのである。例えば、宇宙空間を自由自在に行き来できるのをはじめ、恐竜がいた時代、古代エジプトのピラミッド時代、その他の、ありとあらゆる時代とあらゆる場所、また、未来社会のありとあらゆる場所とあらゆる空間、その他、その人が「空想や想像」の翼を拡げさえすれば、あつという間に自由自在に行き来ができるということである。

つまり、「漫画」や「アニメ」というのは、われわれ「人間の脳」が持ち合わせている「空想（想像）能力」の素晴らしさ、その現実を遙かに超越した「超次元的思考」の、あるがままの正直な「空想や想像の産物」の「一つの表現形式」になるということである。つまり、その人の実に多種多様な「空想や想像」（或いは「夢」）、その他は、いわゆる「漫画」や「アニメ」という形式でこそ、まさに思う存分に表現でき得るということである。そのように「漫画」や「アニメ」という表現方法によって、この世のありとあらゆる内容のものを表現でき得るかと思うが、しかし、漫画だけを唯一の「教科書」のように読んで、現実に則した内容の「新聞、雑誌、書物、その他」などを全く読まないとするれば、それには、やはり「大きな問題」があるということである。その最大のものとは、「漫画の世界」というものは、そもそも「空想や想像力」などを元としたどこか現実から遊離した感じの内容になりやすいたとも、いわゆる「内容そのもの」も現実に則した「厳密さや正確さ」

などには欠けるところがあるのである。——つまり、「漫画」というのは、どうしてもその人の「空想や想像力」などから生み出されることが多く、一方の「新聞、雑誌、書物、その他」などは、どちらかと言えば、現実に則した思考を行なっているものであり、それゆえ、現実に則した「内容の正確さや厳密さ」などがどうしても強く要求されるものであるが、「漫画の世界」では、たとえどのような訳の分からない内容でも許されてしまうというところがあり、そこに「漫画の世界」と「現実の世界」との決定的な違いがあるということがある。

例えば、「新聞、雑誌、書物、その他」などの世界では、基本的には、現実に則した「正確な理解」や「厳密な思考」などが、どうしても強く要求されるものであるが、一方の「漫画の世界」というのは、われわれ「人間の脳」が持ち合わせている「空想（想像）能力」の素晴らしさ、その現実を遙かに超越した「超次元的思考」を元として生み出されることが多い世界であり、それゆえ、現実に則した「正確な理解」や「厳密な思考」などは、ことさらに強く要求されるということのない世界であるとともに、「漫画」を生み出す「思考方法」で、実に多種多様な「空想（想像）の世界」を生み出すことはでき得ても、現実の実に様々な問題に直面した時に、それは、自分のことであれ、他人のことであれ、あるいは社会や国家のことであれ、それらの問題を現実に則して解決していくという厳密な「思考（思索）能力」というものは、育ちにくく、どうしても「空想（想像）の世界」（つまり「仮想の世界」）に遊ぶような傾向になりやすく、漫画だけを唯一の「教科書」のように読んで、現実に則した内容の「新聞、雑誌、書物、その他」などを全く読まないとすれば、現実に則した厳密な「思考（思索）能力」というものは、育ちにくくなってしまいうという、そういう「大きな問題」が生じて来るということである。

それゆえ、「漫画」だけを好んで読むだけではなく、ほかの「新聞、雑誌、書物、その他」なども合わせて読むことによつてこそ、人間としてバランスの取れた「思考（思索）能力」が健全に育つことになるというのが、ここでのまさに結論になるのである。

*

*

ちなみに、「漫画の世界」を「実写版」で「映画」や「テレビドラマ」などにすることも多いかと思うが、その場合、成功する確率の高いのは、例えば、「ラブコメ」や「現実に沿った内容の漫画」であることが多く、その最大の理由は、「漫画の世界」と「実写の世界」との間に、それほど決定的な「違い」（ズレ）を感じないで済むからであり、一方、例えば、「ドラゴンボール」や「北斗の拳」、或いは、「機動戦士ガンダム」や「ワンピース」、その他などを「実写」にするとなれば、それは、やはりなかなか難しいことになるのだろう。——確かに、「スーパーマン」や「バットマン」、或いは、「スパイダーマン」などは、「実写」として大成功しているのかも知れないが、ただ、ここで言いたいことは、次のようなことである。——つまり、「漫画の世界」と「現実の世界」との間に、それこそ、まさに決定的な「違い」（ズレ）が感じられるようなものは、それを「実写」にすることは、なかなか難しく、その最大の理由としては、そのような「漫画」は、まさに現実を遙かに超越した「超次元的思考」を元として生み出された「空想（想像）の世界」（つまり「仮想の世界」）の「漫画」であるがために、「漫画の世界」と「実写の世界」との間には、あまりにも決定的な「違い」（つまりズレ）があり過ぎて、どうしても違和感を感じてしまうという理由によるのである。

また、昔の「映画」や「ドラマ」というのは、多くの場合、主人公やヒロインたちで
きるだけ魅力的でカッコいい台詞セリフなどを言わせて、誰もが心惹ひかれるような理想的な役を
演じていたかと思うが、今はそのような主人公やヒロインたちは、一体、どこへ行ってし
まったのかと敢えて問えば、それは、実は「漫画」や「アニメ」の主人公やヒロインとし
て、華々はなはなしく甦よみがえっているのであり、しかも、今や「映画」や「テレビドラマ」などは、
その人気を失い、一方、「漫画」や「アニメ」こそは、まさにその「全盛期」になっ
てきているのである。

*

*